CORE
Metadata, citation and similar papers at core.ac.uk

埼玉学園大学・川口短期大学　機関リポジトリ

『百詠和歌』注釈（二）

著者	胡 志昂，山部 和喜，中村 文，山田 昭全
雑誌名	埼玉学園大学紀要．人間学部篇
巻	8
ページ	288(1)-267(22)
発行年	2008-12-01
URL	http://id.nii.ac.jp/1354/00000800/

Creative Commons : 表示 - 非営利 - 改変禁止
http://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/3.0/deed.ja

『百詠和歌』注釈（二）

胡志昂・山部和喜・中村文・山田昭全

前回に引き続き、『百詠和歌』の注釈を掲載する。今回は、「天象部」の「月」二首および「星」二首（胡志昂担当）、「坤儀部」の「石」二首（山部和喜担当）、「芳草部」の「菊」二首および「竹」二首（中村文担当）、「嘉樹部」の「松」二首（山田昭全担当）の計十二首を掲載した。注釈原稿は輪読の場で出されたメンバーの意見を受けてはいるが、執筆の責任が個々の担当者にあることは、前回と同様である。忌憚のないご意見、ご批正をお寄せいただければ幸いである。

（中村記）

凡例

・本稿は、源光行著『百詠和歌』に注釈を加えたものである。『百詠和歌』の本文は独立行政法人国立公文書館内閣文庫本（函架番号二〇一―三五九）に拠って翻刻し、濁点・句読点を付した。仮名遣いの誤っている箇所は歴史的仮名遣いに改め、右傍カッコ内に元の仮名遣いを示した。底本のままでは意味が通らない場合は校訂を施し、その左傍に点を付して、もとの形を右傍カッコ内に示した。

・摘句一句とこれに付された光行注および和歌一首を一組として掲出し、『新編国歌大観』第五巻所収「百詠和歌」の歌番号に従って、各組の冒頭に番号を振った。

・注釈は本文の翻刻に続けて、【百詠】【百詠注】【語釈】【通釈】【余考】の項目を立てて行った。

・【百詠】には『百詠和歌』の原拠となった『李嶠百詠』の詩句を示し、書き下し文を（　）内に示した。詩句はその関連性を考慮して一聯の形で掲出したが、光行の歌注と関連しない句については特に注釈を加えなかった。

・【百詠注】には『李嶠百詠』に張庭芳が付したとされる注を掲げた。慶應義塾図書館蔵本を胡志昂編『日蔵古抄李嶠詠物詩注』（「海外珍蔵善本叢書」上海古籍出版社、一九九八年）に拠って掲げたが、同書の本文に不審がある場合には、陽明文庫蔵の百詠注等を、慶應義塾大学附属研究所斯道文庫に収められる紙焼き写真によって参照した。割注は〈　〉を用いて示し、読点を施し、書き下し文を（　）内に付した。字句に位置の訂正が補入記号等で示されている場合には、それに従って本文を改めた。

慶應義塾図書館蔵『百詠注』の注文に誤りがあって書き下し文が作れない場合には、他本や出典に従って書き下した。その根拠とした書物名とその本文は、【百詠注】の後に※を付して示した。

・『百詠和歌』が典拠とした典籍を類書等から引用する場合、類書名・巻数・項目名の順で典拠を示した。また、説話などが複数の典拠に収められている場合には、時代的にもっとも古い典拠で代表させるか、『百詠和歌』に形がもっとも近いもので示すことがある。なお、典拠については、杤尾武編『百詠和歌注』（汲古書院、一九七九年）から多くの学恩を受け、本注釈の記述にも同書と重複する箇所が多いが、煩雑を避けていちいち断らなかった点を諒承されたい。

・【語注】等で引用する和歌の本文および歌番号は、特に断らない限り、『新編国歌大観』に拠った。勅撰集の和歌は撰集名・部立・歌番号・作者名の順で示した。

注　釈

巻第一　天象部「月」

3　蓂開二八時　　堯の時世おさまり、政すなほにして瑞草（ズイ）蓂英（メイエイ）庭におひたり。月のついたちより一日にひとつの花を開く。十五日に十五の花あり。十六日よりひと日に一の花落て、つごもりに至ておちはてぬ。もし小月なれば一の花をのこせり。又云、ついたちよりひと葉ずつおひて、十六日よりひと葉ずつおつといへり。蓂はおつ二八の時とぞあるべきを、ひらくの字おぼつかなし。もし蓂は開二八の時までと心得べきにや可勘之。

又月のうちに桂あり。十五日までいよいよあきらかにさかりなりといへり。

咲そむるいろにはれゆく月影のくもるは花のおつるなりけり

【百　詠】

桂生三五夕　蓂開二八時（桂は生る三五の夕、蓂は開く二八の時）

【百詠注】

桂生三五夕〈南中記曰、南洲有二八桂樹一、生（ナレリ）月中也（ニ）〉（南中記に曰く、南洲に八桂樹有り、月の中に生ずるなり）。蓂開二八時〈瑞応図曰、堯時、蓂莢生レ庭ニ、従レ朔至（ルマデ）十五日生ニ一葉一、従二十六日一日落二一葉一也〉（瑞応図に曰く、堯の時、蓂莢庭に生ず。朔より十五日に至るまで一葉ずつ生ず。十六日より日に一葉ずつ落つるなり）。

【語　釈】

○蓂　蓂莢ともいう。月の暦を示す伝説の仙草。『帝王世紀』に「堯時、有草夾階而生、毎月朔日生一莢、至月半則生十五莢。至十六日後、日落一莢、至月晦而尽。若月小余一莢、王者以是占暦。唯盛徳之君、応和気而生、以為堯瑞、名日蓂莢、一名暦莢、一名瑞草。（堯の時、草有り階を夾みて生じ、毎月朔より日に一莢生じ、月半に至りて則ち十五莢生ず。十六日に至る後、日に一莢落ち、月晦に至りて尽く。若し月小ならば一莢余る。王者これを以て占歴す。ただ盛徳の君のみ、和に応じて生ず、以て堯瑞と為す。これを名づけて蓂莢といふ。一の名は歴莢、一の名は瑞草）」（『太平御覧』巻四「月」）とある。**○堯**　古の伝説時代の五帝（黄帝・顓頊・帝嚳・堯・舜）の一人。帝堯は陶唐氏と称し、姓は伊祁、名は放勲という。堯の時世がよく治まったとされる。『史記』

五帝本紀に「帝堯者放勲、其仁如天、其知如神、就之如日、望之如雲。（帝堯は放勲。その仁は天の如く、その知は神の如く、これに就けば日の如く、これを望めば雲の如し）」とある。**○蓂英**　蓂は蓂莢、英は花。蓂莢は陰暦の発生を語る伝説として様々な書物に伝えられたが、「蓂英」の表現は見当たらない。群書類従本は「英」右旁に「莢歟」とある。**○ついたち**　朔、朔日。月が立つという意味で陰暦の毎月一日をいう。**○つごもり**　晦日、三十日。月がこもるという意味で陰暦の毎月末日をいう。**○可勘之**　よく吟味すべきである。勘はくらべて考える、つき合わせて調べる意。**○桂**　ここでは月の桂樹をいう。月桂は月の満ち欠けに随い消長するという伝説。虞喜安「天論」に「俗伝、月中仙人桂樹、今視其初生、見仙人之足漸巳成形、桂樹後生。（俗に伝ふ、月中の仙人の桂樹は、今その初めて生ずるを視るに、仙人の足漸く巳に形成るを見るのみ、桂樹後に生ず）」（『初学記』巻一「天」）とある。**○そむる**　「初める」と「染める」に掛けた掛詞。**○はれゆく月影**　覆い遮るものがなくなり、月影や花の色が鮮明になる様を表す。和歌に「雲晴月明」の歌題があったことからも知られるように空晴れて月明らかな光景が好んで詠まれた。

【通　釈】

〈句〉　堯の時蓂莢という月の暦を示す仙草が一日より十五日まで日に一つずつ莢が出来、十六日から一莢ずつ落ちていく。

〈注〉　古の聖帝堯の時、世の中が穏やかに治まり、政治は素朴であった。瑞草の蓂莢が堯の庭に生え、陰暦の一日から日に一つずつ花が咲き、十五日には十五の花が咲く。十六日から日に一花ずつ散り、晦日には散り尽くす。もし小の月なら一つの花が残る。また、一日から葉が一枚ずつ生え、十六日から一葉ずつ散るともいわれる。蓂草は十六日から散るというべきなのに、開くという字は落ち着かない。或いは蓂草は十六日まで開くと理解すべきか、考えなければならない。また月の中に桂の木があり、十五日の満月になるにつれますます明るさを増すという。

〈歌〉　蓂草が一花ずつ咲き始めるにつれその色に染まって明るさを増してゆく月光が曇り始めるのは蓂草の花が散り始めるからよ

【余　考】

光行注は百詠の古注と異なり、独自の注解を施すことがあるのは、「ひらくの字おぼつかなし」という判断が端的に示している。句中「開」の字は明活字本・全唐詩本「分」に作る。この異文は北宋の初めに成った『文苑英華』に遡るので、光行は異本の存在を知っていたのかもしれない。だとすれば、本文の用字を「おぼつかなし」と判断しながらも底本をそのままにしたところに、由緒の古い本文を尊重する態度が現れているといえる。対して、注にある「蓂英」なる語句が漢籍に見当たらないにもかかわらず、ルビを振ってまで「英」にこだわったのは、詩注の和訳や和歌との照応の必要があったからであろう。この場合、注は出典を明示していない。古注に対する姿勢がここにも伺えるように思われる。なお、注「月のうちに桂あり」云々以下は、詩句「蓂開二八時」ではなく、その上の句「桂生三五夕」の注を取り込んで生かしたものである。初学記の事対でも同じ二つの典拠を並べている。

歌は蓂草の伝説を踏まえつつ和歌の常用表現で詩句の趣意を流

麗に織り出している。

4　分レ輝ヲ度鵲鏡　月の一の名に破鏡と云。光をわかつとは月の影はじむるなり。昔、女おとこありけり。世のみだれにあひてわかれてとをき国へゆくとき、鏡をわりてかた鏡づゝ取てかたみとしてさりぬ。この女心ならず夫してけり。時にかたかゞみかさゝぎになりて、はるかにとびておとこのかゞみと一になりぬ。おとこ、あはれとおもひしりぬ。後の人、鏡をいて、うらにかさゝぎをうつせり。このことは、鄭の人曹文といへり。へだてこし昔のかげもかへりきてあひ見る月の鏡なりけり

【百　詠】

分暉度鵲鏡　流影入蛾眉（暉を分ちて鵲鏡度り、影を流して蛾眉に入る）

【百詠注】

分レ暉ヲ度ニ鵲鏡一〈神異経日、昔有二夫婦一、将レ別、打レ鏡破、方ニ執二一片一以為レ信。其妻與レ人和通、其片鏡化為二飛鵲一、至二夫前一、夫乃知レ之。後人鋳レ鏡、因為レ鵲安二背上一也〉（神異経に曰く、昔夫婦有り、将に別れんとし鏡を打ち破り、方に一片を執り以て信とす。その妻人と和通す。その片鏡化して飛鵲と為り、夫の前に至る。夫乃ちこれを知る。後人鏡を鋳るに、因りて鵲を為り背上に安くなり）。流レ影入二蛾眉一〈鮑明遠玩レ月詩曰、娟娟似二蛾眉一〉（鮑明遠が月を玩ぶ詩に曰く、娟娟として蛾眉に似たり）

【語　釈】

○暉を分かつ　満月を二分する形の弦月をいう。『易緯・乾鑿度』に「月、三日成魄、八日成光。（月は三日に魄を成し、八日に光を成す）」（『芸文類聚』巻一「月」）とある。**○鵲鏡**　裏に鵲の形を鋳造した銅鏡のこと。二つに割った鏡の形見の片方が鵲と化して夫の前に飛んで行ったことから妻の不貞が露見した故事による。『神異經』に「昔有夫妻将別、破鏡、人執半以為信。其妻與人通、其鏡化鵲飛至夫前、其夫乃知之。後人因鋳鏡、為鵲安背上、自此始也。（昔夫妻有り、将に別れんとし鏡を破り、一人して半を執り以て信と為す。その妻人と通ず。その鏡鵲と化し、飛びて夫の前に至る。その夫乃ちこれを知る。後人因りて鏡を鋳るに鵲を為りて背の上に安くはここに始まる）」（『太平御覧』巻七百十七「鏡」）とある。**○破鏡**　月の別称。鏡を破ったように欠けた形の月をいう。**○影はじむる**　陰り始める。月が欠け始めること。**○かた鏡**　鏡を二つに割ったその片割れ。**○かたみ**　形見は本来過去の思い出の種となる品物を意味するが、ここでは漢語「信」の訳で信義を守り通し再会を約束する証の意。**○心ならず**　自分の本心ではない。不本意にもそうなってしまったこと。**○うつす**　原物になぞらえて模造すること。**○鄭**　春秋時代の国またはその故地をいう。今の河南省新鄭市一帯。**○曹文**　人名。他の事跡は未詳。**○へだつ**　「隔つ」は空間或いは時間上離れていて、間に障害となる物事が存在することをいう。**○かげ**　日、月、灯火等の光。また光によって映し出される物の陰影。和歌では影が形から離れないことからあるものに付き添うものを喩える。「よるへなみ身をこそとをく隔つれ心は君が影と成りにき」（古今・恋619詠人不知）。**○あひ見る**　「相見る」「逢見る」は逢いたいもの、恋しいものと逢う、一緒になるの意。「恋ひこひてあひみる夜はのうれしきに日比のうさはいはじとぞ思ふ」（玉葉集・恋1430実泰）

（四）

【通　釈】

〈句〉光り輝く満月を二分する弦月は恰も二つに割った鏡の片方が鵲と化して空を渡っているよう。

〈注〉月の別名は破鏡という。光を分けるというのは月が陰り始めることである。昔ある夫婦がいた。世情の騒乱に遭遇して、二人は別れて遠くの国へ避難していく際、銅鏡を二つに割りそれぞれ片方を取って再開を約束する証として別れて行った。その後女は不本意にも別の男と結婚した。その時に鏡の片割れが鵲と化して遥かな距離を飛んでいって、元の夫の持つ片方の鏡と一つになった。夫は悲しく思い、妻の再婚を知った。その後世の人々が鏡を鋳るとき、鏡の裏に鵲の形を鋳込むようになった。この故事は主人公は鄭の人、曹文という。

〈歌〉遠く離れていた昔の影のように付き添っていたものも帰ってきて破れた鏡も円い一枚に戻った月のような鏡ではなく、遮られ見えなくなった元の影の部分も輝きを取り戻し、光と影とが相輝く鏡に喩えられた月であることよ

【余　考】

底本「影はじむる」は群書類従本、内閣文庫本（２０１・３４８）に「かけはじむる」とあるから、「陰り始むる」「欠け始むる」の意。だが、詩語「暉を分かつ」とは満月を二分する半円の弦月をいい、正に円い鏡を二つに割った形になる。これで鵲鏡の故事も首尾よく一句の詩に納まる。つまり、上の句は陰暦八日の弦月を詠み、下の句「蛾眉」に喩えられる陰暦三日の新月と対になるのである。満月の頂点は十五（三五）日とも十六日（二八）ともいわれる首聯を受ける頷聯として極めて緻密なものといわざるをえない。

巻第一　天象部「星」

5　蜀郡ニ霊槎転ズ　天河うみと一に流れたり。昔、海渚にすむ人あり。年々の六月に、うき木にのりて行き帰ること、期をたがへず。この人、かてをもちてうき木にのりてさりぬ。うかびいでゝ、日のくれ夜のあくるもおぼえずなりぬ。遥に行て一の家にいたりぬ。屋舎あり。おくをみれば、あまたのはた織女、ひとりのうしひけるおとこあり。こゝはいづれの所ぞと問に、汝かへりて蜀郡の厳君平にとへと答て、支機石をあたふ。これをえてかへりぬ。君平にとふに、君平がいはく、其年のその月の其日、客星牛斗とうをゝかしき。則汝が天河にいたれりけるなりといへり。

空にしる人もありけりあまの河くものうき木の波のかよひ路

【百　詠】

蜀郡霊槎転　豊城宝気新（蜀郡に霊槎転じ、豊城に宝気新たなり。）

【百詠注】

蜀郡ニ霊槎転ズ〈博物志ニ曰、海渚人見ニ浮槎ヲ一、乃携テ糧ヲ上レ槎ニ至ニ天河ニ一見ニ織女ヲ一。又一人牽レ牛ヲ以ニ支機玉石ヲ一與レ人ニ、令レ問ニ蜀郡ノ厳君平ニ一。厳君平曰、其月日客星犯ニ斗牛ヲ一、即此人ニ至天河ニ一也〉（博物志に曰く、海渚の人浮槎を見、すなはち糧を携へて槎に上り、天河に至りて織女を見る。又一人牛を牽き、支機玉石を以てこの人に與へ、蜀郡の厳君平に問はしむ。厳君平曰く、その月日、客星斗牛を犯す、即ちこの人天河に至るなり）。豊城宝気新ナリ。〈晋書ニ、張

華見牛斗間有二宝気一、乃令二雷煥爲二豊城令一、移二獄屋一得レ掘二宝剣一也。〉（晋書にいう、張華見るに牛斗の間に宝気有り、乃ち雷煥を令して豊城の令と爲し、獄屋を移し宝剣を掘ること得るなり。）

【語　釈】

○蜀郡　古くは蜀の地、秦の時郡が設置された。今の四川省中部に当たる。**○霊槎**　槎は水に浮かぶ流木、またはいかだ。霊槎は海・黄河と天の川との間を往復し異界に通ずる仙人の筏をいう。『博物志』に「旧説、天河與海通。近世有居海渚者、年年八月有浮槎来過、甚大、往反不失期。此人乃多齎糧乗槎去、忽忽不覚昼夜、奄至一処、有城郭屋舎、望室中多見織婦、見一丈夫牽牛渚次飲之。此人問此為何処。荅曰、問厳君平。此人還、問君平。君平曰、某年某月有客星犯牛斗、即此人乎。（旧説にいふ、天河は海と通ず。近世海渚に居るもの有り、年年八月に浮槎の来り過ぐる有り、甚だ大にして、往反すること期を失はず。この人すなはち多く粮を齎ち、槎に乗りて去る。忽忽として昼夜を覚へず、庵ち一処に至る。城郭屋舎有り、室中を望めば、多く織婦を見る。一丈夫を見る、牛を牽きて渚次にこれに飲ましむ。この人問ふ、ここは何処ぞと。答へて曰く、厳君平に問へと。この人還りて君平に問ふ。君平曰く、某年某月客星の牛斗を犯すもの有り、すなはちこの人なりや）」とある。**○厳君平**　厳は姓、君平は字、名を遵（尊）という。漢の時蜀の成都の市で卜占を生業とし人々を導いた隠遁の賢者、楊雄も若い時師事した。『漢書』王貢両龔鮑伝に「君平ト筮於成都市、以為ト筮者賤業而可以惠衆人。有邪悪非正之問、則依蓍亀為言利害、與人子言依於孝、與人弟言依於順、與人臣言依於忠、各因執導之以善、従吾言者已過半矣。（君平、成都の市にト筮す。以為へらく、ト筮は賤業にして以て衆人に恵むべし。邪悪非正の問有らば、則ち蓍亀に依りてために利害を言ひ、人の子と言はば孝に依り、人の弟と言はば順に依り、人の臣と言はば忠に依り、おのおの執に因りてこれを導くに善を以ってせば、吾が言に従ふ者已に過半ならんと）」。**○支機石**　天界で織姫の機を支えるという伝説の石。『荊楚歳時記』に「張騫尋河源、得一石示東方朔。朔曰、此石是織女支機石、何至於此。（張騫河源を尋ね、一石を得て東方朔に示す。朔曰く、この石これ織女の支機石なり、何ぞ此に至らんや）」（『太平御覧』石）**○君平が**　底本「君平と」とある。内閣文庫本（２０１、３４８）に従う。**○客星**　一定の軌道を回わる星に対して一時的に出現する星をいう。**○牛斗**　牽牛星と北斗星。諸本「牛斗」の下に「とう」の二字が見えるが、衍字か。**○空にしる**　目に見えない物事や景色をなんとなく想像する意を表す歌語。空は天空と空想を掛ける掛詞。**○うき木**　海・河に浮かぶ流木、または筏をいう。『俊頼髄脳』に張騫が天の河の源を尋ねて織女・牽牛星に出合った故事を踏まえた昔の采女の伝承歌「天の川浮木にのれる我なりやありしにもあらず世はなりにけり」を記す。彼女はこの歌で帝の寵愛を取り戻すが、後に垂仁天皇の「いけごけの御陵」の陪塚に生きながら埋められたという。采女にまつわる説話は制度上の関係もあって奈良朝を下らないものが多いが、天の川を行き来する浮木を詠む和歌はやがて「あまの川かよふ浮木にことはむ紅葉の橋はちるやちらずや」（新古今・雑1655実方）という洗練された詠風に結実している。**○かよひ路**　通い路は行き交う通路のこと。天上に想像される雲の交い路は夙に

（六）

六歌仙の一人、遍昭の歌「あまつ風雲のかよひ路吹とぢよ乙女の姿しばしとどめん」（古今集・雑872）によって親しまれ、当該歌も「雲」と取り合わせている。「波のかよひ路」も新古今あたりから歌語として多く使われた。「見し人のおもかげとめよ清見かた袖にせきもる波の通路」（新古今集・恋1333雅経）。が、天の河の「波のかよひ路」を詠む当該歌は、恐らく詩に詠まれた織姫が天の川を渡る七夕の光景「藻帳越星波、玉飾渡雲川。（藻帳星の波を越え、玉飾雲の川を渡る）」（『初学記』巻四「七夕」）のをイメージしたものであろう。

【通　釈】

〈句〉蜀郡に厳君平を訪ねて来たものはかつて異界に通ずる仙人の筏に乗って海辺から天の川へ昇った客星であった。

〈注〉天の河は海に通じて流れている。昔、海辺に住む人がいた。毎年の六月に筏に乗って行き来するものがあり、時期を間違うことがなかった。この人は食料を持参し筏に乗り込んでいった。筏は浮かび出て行って、日が暮れ夜が明けるのも覚えず、遥か彼方のある家に行き着いた。そこに家屋があり、中を窺き見ると多くの織婦が見え、一人の牛を牽く男がいた。この人、ここはどこかと尋ねると、あなたは帰って蜀の厳君平に聞きたまえと答え、支機石をくれた。この人は支機石を貰って還り、厳君平に聞いた。厳君平が言うには、その年のその月に見知らぬ星が牽牛星と北斗星の空域に現れ、すなはちあなたが天の川にたどり着いたのだと。

〈歌〉空を眺めて物事の経緯を知る人もいたことよ、あまの河は白い雲に浮かび星の波に揺れながら海と空の間を行き来する筏の通路であると。

【余　考】

天の河に通う浮槎に纏わる伝説は、俊頼髄脳以降、和歌に多く詠まれた歌題の一つである（後藤祥子「浮木にのって天の河にゆく話―平安和歌史の視座から―」『国文目白』二二号、黒田彰子「張騫考―俊頼髄脳へのアプローチ―」『中世和歌論考　和歌と説話と』など）。中国におけるこの説話はおおよそ二つの源流が認められる。一つは黄河の源を尋ねていくと天の川に到達し、織女の支機石を手に入れた説話。南朝・宋の劉義慶撰『集林』に「昔有人尋河源、見婦人浣紗、問之。曰、此天河也、乃與一石。而帰問厳君平。君平曰、此織女支機之石。（昔人有り、河源を尋ね、婦人の紗を浣ふに見ひこれに問ふ。曰く、これ天河なりと、乃ち一石を与ふ。しかして帰りて厳君平に問ふ。君平曰く、これ織女の支機の石なりと）」（『太平御覧』巻五十一「石上」）と伝える河源を探求したある者が支機石を入手した話はその原型に近いであろう。『荊楚歳時記』に見える張騫が支機石を入手した話は、河源探求が張騫に始まることからその延長上にあるものと思われる。が、東方朔の登場は七夕伝説に絡んで別の伝承経緯を考えねばならず、また集林に「浮槎」が現れないことも注目される。つまり、この系統の説話に実話の変形や文学の虚構も含めて幾つもの話が入り込んでいるのである。胡仔『漁隠叢話』によれば、荊楚歳時記に張華『博物志』を引きながら直に張騫の河源探索に結び付けたが、その根拠を知らないという。宋代の詩話でもこの説話が多くの疑問を呼んでいることを伺わせる。

今一つは海が天の川に通ずるという恐らく視覚の限界からくる

想像の伝説である。この説話を始めて伝える博物志の今本に見る記述は『芸文類聚』の引用文に近いが、『太平御覧』には同じく博物志を引きながら支機石に及んでいる。

（前略）牽牛人乃驚問曰、何由至此。此人具道來意、即問為何処。答曰、君還至蜀、訪厳君平則知之。乃與一石而帰。後至蜀問厳君平、君平曰、此織女支機石也。某年月日有客星犯牽牛宿、正此人到天河時也。（牛牽く人乃ち驚きて問ひて曰く、何由り此に至るか。この人具さに來る意を道ふ。すなはち、ここ何処なりやと問ふ。答へて曰く、君還りて蜀に至り、厳君平を訪はば則ちこれを知らん。乃ち一石を與へて帰す。後、蜀に至りて厳君平に問ふ。君平曰く、これ織女の支機石なり。某年月日に客星あり牽牛宿を犯す。正にこの人天の河に到る時なり。）

唐の趙璘撰『因話録』巻五に河源を窮めた張騫が天河に到達した話を無実な説と退けると同時に、『博物志』の伝える霊槎伝説に絡む「織女の支機石を得て厳君平に問う」話を「後人の相伝」としている。が、趙璘の見た博物志に浮槎と支機石があったことは間違いない。この点、『李嶠百詠』の張庭芳注に引く博物志も同じである。

したがい「星」詩に詠まれた霊槎は後者である。李嶠と同時代の宋之問も「明河篇」に「明河は望むべくも親しむ可からず、願はくは槎に乗るを得て一たび津を問ふ。更に織女の支機石を將って、還りて成都賣トの人に訪ふ」と同じ伝説を詠んでいる。初唐の宮廷詩壇が最も盛んであったこの頃、李邕・奉和初春幸太平公主南莊応制に「伝聞銀漢石支機、復見金與出紫微。（中略）今日還同犯牛斗、乗槎共逐海潮帰。（伝へ聞く銀漢の石支機、復見る金與の紫微より出づること。（中略）今日また同に牛斗を犯し、槎に乗りて共に海潮を逐うて帰る）」と詠み、李嶠をはじめ多くの文学従臣も同題の詩を作っている。当時のこの故事の受容の有様を今に伝えている。

和歌でも「海原や雲居はるかに漕ぐ舟を浮木にのれる人かとぞみる」（広田社歌合22仲網）と海から空へ上る浮木が詠まれているが、その時も海の浮木は張騫の乗物と思われたのであろうか。

6　今宵頴川曲　誰識（カラン）二聚賢人　　後漢書二云、陳仲弓、子姪と共夜荀季和（シュンキクワ）がもとにいたる。父子頴川人なり。ときに天に徳星あつまる。大史奏して申さく、五百里の中に賢人あつまることあり、と申せり。陳寔があざなを仲弓と云り。荀淑が字を季和といへり。

いかにして星のやどりにかよひけんともにあふよのともしびのまど

【百　詠】

今宵頴川曲　誰識聚賢人（今宵頴川の曲に、誰か識らむ賢人の聚うことを。）

【百詠注】

今宵頴川曲（ノクマニ）、誰識（カラン）聚（フヲ）二賢人一。〈後漢陳仲弓与二子姪一夜遊二荀淑季和一、父子討論（ス）。頴川人也。于時徳星（ニ）聚（ル）。太史奏曰、五百里内（ノニ）賢人聚（ル）也。〉（後漢の陳仲弓、子姪と夜荀淑季和に遊ぶ。父子討論す。頴川の人なり。時に徳星聚まる。太史奏して曰く、五百里の内に賢人聚まるなり。）

（八）

【語　釈】

○潁川　郡名、秦の時に設置された。現在の河南省中部及び南部に当たり、潁水が域内を流れる。**○曲**　曲がりくねる川の辺。**○賢人**　ここでは潁川出身の後漢の名士・荀淑（字は季和）と陳寔（字は仲弓）らを指す。**○陳仲弓**　後漢の名士・陳寔、仲弓は寔の字。**○子姪**　子と甥。**○荀季和**　後漢の名士・荀淑のこと、季和は字。**○父子**　父と子。ここでは陳寔と荀淑の両家の父子を指す。陳寔に六人の子がいて、うち元方と季方が「二方」と称される。荀淑は子が八人いてみな賢才であり、八龍とも「八慈」とも呼ばれた。『後漢書』荀韓鍾陳列伝に「二方承則、八慈継塵。（二方則を承け、八慈塵を継ぐ。）」**○徳星**　瑞祥の兆とされる星。**○太史**　官職の名。歴史、天文などの記録を司る史官。**○賢人あつまる**　陳寔の親子と荀淑の父子らが一同に集うことをいう。『異苑』巻四に「陳仲弓従諸子姪造荀季和父子。於時、徳星聚。太史奏、五百里内有賢人聚。（陳仲弓、諸子姪を従へ荀季和の父子を造ぬ。時に徳星聚る。太史奏す、五百里内に賢人の聚う有りと）」とある。**○星のやどり**　「やどり」は宿るところ。「星のやどり」は星宿の語訳であるほか、七夕の伝説に絡んで天の河が無数の星の宿るところと考えられたから、星の集まりの意。「天原ふりさけみれば七夕のほしのやどりに霧立渡る」（新千載集・秋332源経信）。**○ともしび**　明かりを点している灯火。万葉では海人の生活実感をともなう漁火を詠む歌「紀の國の雑賀（さひか）の浦に出で見れば海人の灯火波の間ゆ見ゆ」（巻七・一一九四）などが際立つが、勅撰和歌では釈教歌に「法の灯」が多く詠まれたほか、七夕を詠む歌では「星合」と取り合わせる「庭のともし火」が七夕祭りを表象する類型と成る。「秋ごとにたえぬ星合のさ夜更けて光ならぶる庭の灯」（新後撰・秋267定家）。「窓の灯」もその頃から夜中の孤独を映し出す表現として用いられた。「これのみとともなふかげもさ夜更て光ぞうすき窓の灯」（新勅撰・雑1185道助法親王）。「ともしびの窓」は外側から灯火を点した屋内を捉える表現と見られる。また「窓の灯」に付随する孤独のイメージを逆転する意図もあったように思われる。

【通　釈】

〈句〉（漢代の史官が徳星の寄り集まることから潁水の辺りに賢人たちの集ったことを察知したというが、天下の英才が悉く朝廷に登用された）今の夜には誰がそのような星象を観察できるだろうか、絶対に起こり得ないのである。

〈注〉後漢書にいう、陳寔は子や姪たちを連れて夜に荀淑の家を尋ねる。陳寔も荀淑も父子とも潁川の出身である。その時夜空に吉祥の徴となる星が寄り集まった。大史令が奏上していうには、その空域に当る地上の五百里の地域内に賢人たちが集っていたと。陳寔は字を仲弓という。荀淑は字を季和という。

〈歌〉どのようにして夜空の星宿に通じたのだろうか、潁川の賢人たちが灯火の明かりを点した窓辺で友と会して語り合ったことがどのようにして夜空の星の集まりに反映されたのだろうか。

【余　考】

「窓の灯」は白居易の好んで歌った詩境の一つである。「灯」は古くから詩賦の詠題の一つであったが、白居易の開いた新しい

詩境がある。『和漢朗詠集』に収められた白詩「五声宮漏初鳴後、一点窓灯欲滅時。（五声の宮漏初めて鳴る後、一点の窓灯滅えんと欲する時）」は、「禁中夜作書與元九」の後半であるが、前半は「心緒万端書両紙、欲封重読意遅遅。（心緒万端両紙に書し、封せんと欲し重めて読めば意遅遅たり）」と、灯の下で詩文を制作する自らを述べている。灯火と読書・作文の関わりを表す端的な表現に、「机上従妨一夜睡。灯前読尽十年詩（机上に従え一夜の睡を妨ぐも、灯前に十年の詩を読み尽す）」（歳暮寄微之）の句が挙げられる。『新勅撰集』に入選した釈教歌「夜もすがら窓のともしびかかげてもふみみる道に猶まよふ哉」（711実寿）も同じ詩境を前提とする。

「窓の灯」は孤独な姿を映し出すことがある。「耿耿殘灯背壁影、蕭蕭暗雨打窓声（耿耿たる殘灯の壁に背す影、蕭蕭たる暗雨の窓を打つ声）（上陽白髪人）の描写に閨怨の深い孤独感が漂うが、詩人が自らを述べるものではない。白楽天が自ら詩に登場する時、「殘灯影閃牆、斜月光穿窓。（殘灯の影牆に閃き、斜月の光窓を穿つ）」（夢與李七庚三十三同訪元九）と歌い、「南窓背灯坐、風散闇紛紛。（南窓灯を背いて坐せば、風に散るる闇紛紛たり）」（村雪夜坐）と歌ったそこに些かの物侘しさはあるものの孤独感を伴わない。この点、和歌「うきにそふかげよりほかの友もなししばしな消そ窓のともしび」（続後撰・雑1116法印覚寛）の境地と相異なる。

「灯」は詩にあって宴会の不可欠な要素であった。白詩にも「添酒回灯重開宴（酒を添へ灯を回して重ねて宴を開く）」（琵琶引）、「灯前に合ひて一家の春を作る」（夜聞賈常州崔湖州茶山境会想羨歓宴因寄此詩）といった表現に事欠かない。「ともしびのまど」は屋外から想見した「ともにあふよの」屋内の情景である。そこで和歌と異なる詩の造形を和歌に盛り込む必要があったのであろう。

（胡　志昂）

巻第二　坤儀部「石」

23　巖花鏡裏発　　武都丈夫、化して女の身となれり。すがたかたち、世にすぐれたりければ、蜀王の后となりぬ。其の後、久しからずして命終りにけり。武擔山の上にはぶりて其の所に石の鏡を懸けたり。鏡の中にいはほの花うつるといへり。

石中菱花発。

むかしみしにほひはいづら鏡山いはねの花のかげばかりして

【百　詠】

岩花鏡裏発　雲葉錦中飛（岩の花は鏡の裏（うち）に発けたり、雲の葉は錦の中に飛ぶ。）

【百詠注】

岩花鏡裏発（ノハノケタリ）〈庾肩吾詩曰、石裏菱花発〉（庾肩吾の詩に曰く、石の裏（うち）に菱の花 発く。）

【語　釈】

○巖花　巖（いわお）に咲く花のこと。ここでは後述する伝説中の石の鏡の中に映る蜀王の妃の生前の美しい容姿を花に喩える。**○武都**　中国四川省綿竹縣の北にある山。**○丈夫**　一人前の男子。**○武擔山**　中国四川省成都県北にある山。**○石中菱花発**　『百詠注』では、この句を庾肩吾の詩として、『百詠』「巖花鏡裏発」の典拠に挙げる。「庾肩吾」は、梁の人。字は子慎、於陵の弟で、子に庾信がいる。梁の武帝の普通元年前後の人。杤尾武編『百詠

（一〇）

和歌注』では、庾信の『庾子山集』「鏡賦」の「臨水即池中月出、照日即壁上菱生」を参考に挙げる。**○にほひ**　輝くような美しさ。**○いづら**　どこにあるのか（どこにもない）という反語表現。「いにしへのにほひはいづらさくら花こけるからともなりにけるかな」（伊勢物語・六二）**○鏡山**　ここでは鏡を掛けた武擔山を指す。近江の国の歌枕である「鏡山」の名称を借りて表現したもの。「花の色をうつしとどめよ鏡山春よりのちの影や見ゆると」（拾遺集・春73坂上是則）。

【通　釈】

〈句〉　岩の花が、鏡の中に映り開いている。

〈注〉　武都山の男が化して女性の姿になった。その容姿は世に並ぶものなく素晴らしかったので、蜀王の妃となった。（彼女は）その後幾ばくもなく死んでしまった。武擔山の上で葬り、そこに石の鏡を懸けた。鏡の中に岩の花が映る。石中菱花発とはこのことである。

〈和歌〉　生前の蜀王妃の美しさはいったいどこにあるのか、この武擔山では。ただ物言わぬ岩の花の影が鏡に映っているだけである。

【余　考】

慶大本の百詠注は、庾肩吾の詩句を引くのみであるが、百詠和歌は、注文の冒頭「武都丈夫」以下「其の所に石の鏡を懸けたり」まで、山の精から化した妃が死んだ際に、蜀王は武擔山の上で石鏡をその墓標としたという話を載せる。原拠の故事は、「揚雄蜀本紀云。武都丈夫化為女子。顔色美絶。蓋山精也。蜀王納以妃。無幾物故。乃発卒之武都。擔土葬於成都郭中。号曰武擔。以石作鏡一枚。表其墓。（揚雄が蜀本紀に云く、武部に丈夫あり化して女子と偽る。顔色、美絶なり。蓋し山の精なり。蜀王納めて以て妃とす。幾くもなくして物故す。乃ち卒を発して武部にえかしむ。土を擔げて成都の郭中に葬る。号して武擔と曰ふ。石を以て鏡一枚を作る。其の墓を表す。）」（『後漢書』任文公伝の注、『初学記』巻五「石」、『芸文類聚』巻七〇「鏡」、『太平御覧』巻七一七「鏡」にも）。陽明本がこの部分を欠いているため確認できないが、一応この故事は、百詠注から引き継いだものではなく、百詠和歌が他から引いたものと見ておきたい。

「鏡の中にいはほの花うつるといへり」以下は、「石中菱花発」とする百詠注に対する解釈を示したものである。

24　入宋星初隕　星地に落ちたり。これを見るに石にて五色なり。谷水のいしまにもかくやどりけりあまの河原の星の光は

【百　詠】

入宋星初賈　過湘燕早帰（宋に入りて星 初めて賈（お）つ、湘を過ぎて燕早く帰る）

【百詠注】

入レ宋（ニ）星初賈（ヲツ）〈左伝曰、星隕（ヲツ）二於宋（ニ）一視（レバ）レ之（ヲ）乃石也〉（左伝に曰く、星 宋に隕つ。之を見れば乃ち石なり。）

【語　釈】

○宋　周代の諸侯国の一つ。（?～紀元前二八六年）。**○星**　『百詠注』にあるように、僖公十六年に宋国において、流れ星が地上に落ち、それを見ると石であったという。『春秋左氏伝』僖公十六年「春隕石于宋五隕星也」（『初学記』巻五「石」、『太平御覧』

巻五「星上」にも）。**〇五色**　『春秋左氏伝』では、落ちてきた隕石の数を五とする。その色が五色であったと示すのは『百詠和歌』のみであり、何に拠ったか未詳。**〇いしま**　谷川などの石や岩の間で、水が激しく流れる所。「いしま行く水の白浪立帰りかくこそは見めあかずもあるかな」（古今集・恋四682よみ人しらず）。**〇やどる**　川の水や鏡などにものの影を落としていること。**〇天の河原**　天の川の河原。

【通　釈】

〈句〉　宋国で星が初めて地上に墜ちた。

〈注〉　星が地上に墜ちたのだ。それを見ると、石で五色であった。

〈歌〉　昔、宋国で空から星が落ちてきたように、水の激しく流れる谷川の石間にも、このように映じていることだ。天の河原の星の光は。

【余　考】

星の歌は数は多くないが、光行歌と同様に天の川と石間を取り合わせたものには、「天河冬は氷にとぢたれやいしまにたぎつおとだにもせぬ」（後撰集・冬488よみ人しらず）がある。天と地の対比という点では、空の月の光と「石間」の水に映る光を詠ったものとしては、「こほりとぢいしまの水はいきなやみ空すむ月の影ぞ流るる」（源氏物語・朝顔）、「いしまゆくみたらし川のおとさえて月やむすばぬこほりなるならん」（千載集・秋上293藤原公時）がある。この歌は、空の星が地上に落ちたという故事を下敷きにしながら、天と地の対比でありながら、空の天の川の星の光（月の光ではなく）と、地上の川の石間に映ずる光との両方を詠み込んでいるところに特長がある。

（山部和喜）

巻第三　芳草部「菊」

43　金精九日開ニ　菊の花の色黄なる故に金菊と云り。又秋はにしにかたどる。西は金也、菊は九月九日に花開く。この花さけにうかぶと云り。

ながつきのきくもあはれと思ひしれこゝぬかごとのはなのまとゐを

【百　詠】

玉律三秋暮　金精九日開（玉律三秋の暮　金精九日に開く。）

【百詠注】

金精九日開ニ〈古詩ニ曰、岸菊聚二新金一。〉精ハ即菊也、其花ノ色黄ナリ、故曰二金精一、九月九日ニ盛開也。一本、秋ハ西方、金ナリ、菊ハ是金ノ精、九月九日花開泛レ酒〉（古詩に曰く、岸の菊新金を聚む。金精は即ち菊なり。その花の色黄なり。故に金精と曰ふ。九月九日に盛りに開くなり。一本に、秋は西方、金なり。菊はこれ金の精、九月九日に花開き酒に泛ぶ）

【語　釈】

〇金精　百詠注にも見えるごとく、菊花が黄色で秋の代表的な花であることから金精に見立てた表現。光行注では「金菊」となっている。なお、百詠注が引く古詩の「岸菊聚新金」の句は、隋元行恭「秋游昆明池」に見える。『初学記』巻七「昆明池」に収める。**〇秋はにしにかたどる、西は金也**「かたどる」は通じ合う意。陰陽五行において秋季は西の方角に相当し、また五星の太白（金星）に当たる。菊を「金精」と表現した理由を陰陽五行説によって説明するか。百詠注の「一本」に従った注。**〇九月九日に花開く**　『藝文類聚』巻八十一「菊」に「崔寔月令九月九日可採菊花（崔寔月令に九月九日、菊花を採るべし）」と見える。**〇この花さけにう**

かぶ　六朝末以降、九月九日には厄災を除くために菊花を浮かべた酒を飲む風習が盛んになった。『西京雑記』に「毎年九月九日佩茱萸、食蓬餌、飲菊花酒、以辟邪延寿（毎年九月九日に茱萸を佩び、蓬餌を食し、菊花の酒を飲む。以て邪を辟け寿を延ぶ）」と見える。**○きくもあはれと**　「あはれ」は心を強く揺り動かされた際の情動。ここでは感嘆・感動を指すか。「きく」は「菊」に「聞く」を掛ける。**○思ひしれ**　人間が毎年変わることなく繰り返す営為の意図を汲み取って、感心なことだと思ってくれと菊に頼みかける語。同様の表現は阿闍梨仁俊が北野社で詠んだ、「あはれとも神々ならば思ひしれ人こそ人のみちをたつとも」（古今著聞集・巻第五・和歌）等に見られる。**○こゝぬかごとの**　毎年、九月九日が来るたびの。「ここぬか」は「ここのか」の古い形。「ここぬかごと」の措辞と重陽を組み合わせた例は、「長月のここぬかごとにつむ菊の花もかひなくおいにけるかな」（拾遺集・秋185躬恒）のように早くから見える。「ここぬかのここのへにさくはななればひさしきときのためしにをみよ」（高遠集84）のように、「ここぬか」のみで九月九日の重陽宴を指す場合もある。平安末期にも「いくあきにわれあひぬらんながつきのここぬかにつむやへのしらぎく」（山家集467）がある。**○はなのまとゐ**　「まとゐ」は親しく一座して楽しい時を過ごすこと。「花の円居」は花に誘われて集まった人々が懇親・歓談すること。ここでは重陽節に人々が集い合い菊花を浮かべた酒を飲んで一時を愉しく過ごすこと。用例は多くはないが、「うらやましいるみともがなあづさゆみふしみのさとのはなのまとゐに」（後拾遺集・春上79皇后宮美作）を初例として、平安末期においても俊恵（林葉集169）・守覚法親王（集22）が用い、建久六年1195経房家歌合では源長俊が「よしのやま花の円居のあとなれや木の下かげの雪のむら消」と詠んでいる。ただし、これらの例はすべて桜の花の下における宴を詠むもので、重陽節に用いた例は光行歌以外には見えない。

【通　釈】

〈句〉　金精（菊の花）は、（秋九月の）九日に開く。

〈注〉　菊の花の色が黄色であるゆえに「金菊」と称するのである。また、秋は（陰陽五行では）西の方角に相当する。西は（同じく陰陽五行においては）金に当たる。菊は九月九日に花を開く。この（菊）花を酒に浮かべるということである。

〈歌〉　長月に咲く菊も、（それを）聞いて感心なことだとしみじみ感じ取ってくれよ。（毎年）九月九日ごとに花の許に集い合い人々が楽しむ重陽の催しを。

【余　考】

光行注はほぼ百詠注に従った内容であるが、「なが月の」歌は、題材を重陽の行事にしぼり込み、菊花に人間の営為を「あはれ」と思えと求める詠じ方が独自である。平安期以降の重陽を詠んだ和歌の伝統が、この作に影響していよう。

44　霾靡（スイ）寒潭側（ノリ）　霾靡（ハ）こまかなる形也。南陽に菊潭あり。此水を取て酒につくれば、味ひ甘して、しかもえひをなさず。胡廣（ハ）南陽の菊水をのみて命長し。八十余といへり。

白菊のそこにうつろふ色みればしづえをわけて落る谷水

【百　詠】

霾靡寒潭側　芼茸暁岸隈（霾靡（すいび）たり寒潭の側（ほとり）に、芼茸（もうじょう）たり暁岸の

隈に。）

【百詠注】

霾靡寒潭側〈細密之皃〉芼茸暁岸隈〈南陽有二菊潭一取二此水一為レ酒、味甘不レ酔レ人也〉（細密の皃）（南陽に菊潭あり。この水を取りて酒をつくる。味甘くして人を酔はせざるなり。）

【語　釈】

○霾靡　本来は草がなよやかである様子を示すが、百詠注に「細密之皃」とあるように、ここでは菊の花が群がり合うさまを示すのであろう。光行注の「こまかなる形也」も、小さいものがびっしりと寄り集まって咲く菊の様態を示しており、百詠注を受けたものと考えられる。**○寒潭**　冷たい水が流れる川の淵。**○芼茸**　草が茂り乱れるさま。**○南陽**　南陽郡。現在の中国河南省南陽縣治。以下、「えひをなさず」までの記述は、百詠注で「芼茸暁岸隈」の句に付された注の内容をほぼ踏襲する。**○菊潭あり**　『元和郡縣志』「山南道」に、「漢の酈縣、武陶戍の地」であった所を、隋開皇三年に「縣界内の菊水」により「菊潭縣」としたこと、「縣東石澗山」に発する菊水は、「極めて甘く馨り、谷中三十余家また井を穿たず、仰ぎて此水を飲む、皆壽百余歳」であることなどが記される。『藝文類聚』巻八十一「菊」にも、「風俗通曰、南陽酈縣有甘谷、谷水甘美、云其山上大有菊、菊水従山上流下、得其滋液、谷中有三千餘家、不復穿井、悉飲此水、上寿百二三十、中百餘、下七八十者、名之大夭、菊華軽身益気故也（風俗通に曰く、南陽の酈縣に甘谷あり。谷水甘美なり。その山上に大いに菊あると云ふ。菊水山上より下に流る。その滋液を得て、谷中に三千余家あり。また井を穿たず。悉くこの水を飲む。上寿は百二三十、中は百余、下七八十の者、これを大夭と名づく。菊華身を軽くし、気を益すがゆゑなり。）」と見える（『初学記』巻二十七「菊」にも）。これらとほぼ同内容の記述は、百詠注では「霾靡寒潭側」の一つ前の、「香泛野人杯」の句に注されている。光行は菊水に住む人々の上寿は採らず、百詠注にはない胡廣のエピソードを加えた。なお、光行と同時代の成立と考えられる『海道記』『東関紀行』には、承久の乱に参画して鎌倉に連行された藤原宗行が、菊川宿において「彼南陽県菊水　汲下流延齢　此東海道菊河　宿西岸終命」の詩を書き残したことが記される。**○胡廣**　後漢の政治家。その伝は『後漢書』列伝に載るが、この話柄は収めていない。光行注の「南陽の菊水をのみて命長し、八十余といへり」にもっとも近い記述は、『藝文類聚』巻八十一「菊」に見える、「盛弘之荊州記曰、酈縣菊水太尉胡廣久患風羸、恒汲飲此水、後疾遂瘳、年近百歳、非唯天寿、亦菊延之也（盛弘の荊州記に曰く。酈縣の菊水、太尉胡広久しく風羸を患ふ。恒にこの水を汲みて飲む。後に疾遂に瘳ゆ。年百歳に近し。唯に天寿にあらず。また菊のこれを延ぶるなり。）」と思われるが、光行注は菊水で胡廣の病が癒えたことを記さず、また年齢等の差違も大きいので、これを直接に受容したとは考えにくい。**○うつろふ**　「白菊」と組み合わせた例には、早く「しらぎくのうつろひゆくぞあはれなるかくしつつこそ人もかれしか」（後拾遺集・秋下355良暹法師）がある。この歌の「うつろふ」は「色あせる、衰える」意の「移ろふ」だが、平安末期には「みづのおもにきしのしらぎくうつろへばいけのそこにもはなさきにける」（為忠初度百首416水岸菊）、「しらぎくのうつろふかげをはなかとてをられぬ水をむすびつるかな」（風情集88「菊花水

にえいず」題）のように、「水面に映じる」意の「映ろふ」として用いる例が見える。為忠百首歌は「そこ」の語を用いる点でも光行歌と共通して注意される。また、俊恵の「ひをへつつうつろふままにしらぎくのしたゆく水も色かはりけり」（林葉集524）のように、「うつろふ」に「移ろふ」「映ろふ」の両義を掛けた例も見える。光行歌では「一方の色や香が他方に染みつく」意の「移る」と「映る」を掛けるか。**○しづえ**　根に近い方の下の方の枝。

【試　訳】

〈句〉（菊花は）水の冷たい川のほとりに、びっしりと群がり合って咲き乱れる。

〈注〉霾靡とは微細なものが密に群がり合う状態である。（中国の）南陽に菊潭という地域がある。（そこを流れる川の）水を汲んで酒に作ると、味わいは甘く、しかも人を酔わせない。胡廣は南陽の水を飲んで長命を保った。八十余歳まで生きたという。

〈歌〉白菊（の白い色）がそこに映じたようなその色を見ていると、（それはなんとあの菊の）下の方の枝を分けて落ちて来た（菊潭の）谷水なのだったよ。

【余　考】　光行歌は難解であるが、光行注の関心は菊潭の村人がどれほど長寿を保ったかよりも、その水で作った酒の方に向けられている。ここでは、詠作主はその菊水ないしは酒を目前にしている菊潭の人物と考えて訳を試みた。白菊が水底に映じるように、眼前にある水（酒）にも菊の白い色を湛えている。その理由を探った詠作主が、「なるほど、この水は菊の下枝を分ながら流れ落ちてきたのだから当然なのだった」と得心した体と解した。**【語釈】**の「うつろふ」項に掲げた以外にも、「いけみづにかげはさながらうつろへどみぎはにはなほしらぎくのはな」（言葉集286中原清重「水辺菊」）等、「水面に映る白菊」を詠んだ歌は特に平安末期に増えるが、菊潭のエピソードに依拠した作は光行歌以外には見られない。光行は菊潭の内容を和歌に移そうとする際に、「水面に映る白菊」の詠歌史を参考にし、二つの趣向を結び合わせて一首を成したのではないだろうか。「水面に映る白菊」を詠んだ例が、俊恵や清重・公重など、地下・隠遁者の歌圏で活動した人々の作に認められることは、光行の歌人としての位置を考える上で興味深い。

巻第三　芳草部「竹」

45　蕭条含曙氛（気ヲ）一　呉都賦云竹ハ則緑の葉（葉は）青きくきあり。しもを丶かし雪をとゞむ。檀欒とまどかに、蟬蛸（蝴蝶）とたをやかなり。梢雲無レ踰（コト）、嶰谷（カイ）弗　能（ハコト）連。

霜がれの冬にはよそのみどりにてなつはあきある竹のした陰

【百　詠】

高簳楚江濆　蕭条含曙氛（高簳　楚江の濆（ほとり）、蕭条として曙氛を含めり。）

【百詠注】

高簳楚江濆（ノホトリ）〈楚詞曰、嬋娟之竹寄二生於江濆一也。簳（ハ）竹簳也。竹水之際、謂二之濆（ヨト）一。一本禹貢荊州（ニ）曰、惟（レ）箘簬也、楛（クノハ）三江底（ヨリイタス）レ貢、注曰楛（ハ）中矢簳。尓雅曰、大水溢（レテ）為二小水一（ト）、曰レ濆。文選曰、梢雲（モ）以无レ踰是。則竹常（ニ）有二雲梢也、梢雲瑞雲（ハ）也〉蕭条（トシテ）含（メリ）二曙氛一（ヲ）。（楚詞に曰く、嬋娟の竹、江の濆に寄生す。簳は竹簳なり。また

水の際、これを濆と謂ふ。一本に、禹貢荊州に曰く、惟び菌簵・楛なりと。ここに三江より貢を底す。注に曰く、楛は矢幹に中つと。爾雅に曰く、大水溢れて小水となる。これを濆と曰ふ。文選に曰く、梢雲も以て是を踰るなし。則ち竹常に雲梢あり。梢雲は瑞雲なり。〉

※「禹貢荊州」の書き下しは『書経』「禹貢」の本文に従った。

【語　釈】

○蕭条　ひっそりともの寂しい様子。**○曙氛**　底本は「曙気」だが、「百詠」および「百詠注」の当該詩句に従って改めた。「曙」は夜明けの意。「氛」には単なる「気」の意もあるが、ここでは「もや」と解した。**○呉都賦云**『文選』所収の左太冲「呉都賦」のうち、産物の竹について述べた箇所に、「緣葉翠茎、冒霜停雪、櫹矗森萃、翁茸蕭瑟。檀欒嬋娟、玉潤碧鮮。梢雲無以踰、嶰谷弗能連（緣葉翠茎、霜を冒し雪を停め、櫹矗森萃、翁茸蕭瑟たり。檀欒嬋娟として、玉のごとく潤ひ碧のごとく鮮なり。梢雲も以て踰ゆる無く、嶰谷も連る能はず）」とある。「百詠注」が「高簳楚江濆」の句に付した注の末尾には「梢雲以无踰是」の箇所のみを引く。光行は「呉都賦」から直接引用したか。**○緑の葉青きくきあり**　底本は「緑の葉は青きくきあり」であるが、意が取りにくい。「呉都賦」の「緑葉翠茎」に拠り、葉と茎を並列してともに緑色であると述べたものと見て訂した。**○しもをゝかし**　「をかす」は困難を耐え忍んで持ちこたえる意。冬の霜の厳しさにも負けることなく。**○雪をとゞむ**　「とゞむ」は置き留める意。雪が降れば、冷たさに耐えて葉の上に積もらせる意。**○檀欒とまどかに**　いわゆる「文選読み」で、「檀欒」を漢語と和語で二回読んだ。「檀欒」は竹が美しく伸びて群がっている様子。『初学記』巻二十八「竹」の事対に「檀欒」の典拠として、枚乗の「梁王菟園賦」に「脩竹檀欒夾池水（脩竹檀欒として池水を夾む。）」とあることが記される。「まどか」は「円か」でこんもりと丸い様子。**○蝉蜎とたをやかなり**　文選読み。「蝉蜎」は「呉都賦」では「嬋娟」と表記する。どちらも美しくみやびである意。日本では「頻低寧顧金釵落、嬋娟嬌態今欲休」（経国集・鞦韆篇／嵯峨天皇）のように、女性のあでやかな美しさに用いられる傾向が見られる。「たをやか」は、しなやかに撓むさまを言う。『類聚名義抄』には「嬋　タヲヤカナル」と見える。竹のしなやかに伸びた様態を示した表現。**○梢雲**　高い雲。地名と考える説もある。**○踰**　通り過ぎる。または、渡る意。**○嶰谷**　崑崙の北にある谷。黄帝の時代に、伶倫がその谷に生える竹を採って音律を定めた。**○霜枯れの冬にはよそのみどりにて**　「よそ」は無関係である意。一般の草木の葉が霜枯れる冬の季節にも、竹は無関係であるとして緑であり。雪が降り積もっても竹は変わらず緑の色を保つと詠む歌は稀だが、紀貫之が屏風歌に「しらゆきはふりかくせどもちよまでに竹のみどりはかはらざりけり」（拾遺集・雑賀1177）と詠み、堀河百首にも顕季の「冬籠色かはりてもみえぬかな竹のよごとに雪はふれども」（「竹」1317）の詠がある。**○なつはあきある**　他に用例を見出せない措辞だが、竹が夏季に涼しい緑陰をもたらすことを詠む歌は、「すずしさにいく夜かねぬるくれ竹の林は夏のふしどなりけり」（堀河百首・竹1314匡房）など、特に平安後期以降はしばしば見られるようになる。

【通　釈】

（一六）

〈句〉（竹は）ひっそりともの寂しいたたずまいで、夜明けのもやをはらんでいる。

〈注〉「呉都賦」に言うには、竹はすなわち、緑の葉と青い茎を持ち、（冬の冷たい）霜にも耐え、（雪が降れば葉の上に）雪を積もらせる（が、その緑の色を変えることがない）。群がってこんもりと茂り、しなやかに撓んでいる。（高く伸びているので）高い雲も（その上空を）渡っていくことはなく、（古代に音律の元になったという）嶰谷の名竹も（呉竹に）並ぶことはできない。

〈歌〉他の草木が霜にあって枯れてしまう冬には、（これと）無関係であるとして緑の色を保ち、夏には（涼しい緑陰によって）秋を感じさせる竹の下陰であるよ。

【余　考】

光行歌は、「他の草木が枯れる冬にあっても季節に冒されることはなく、夏にあっては秋という現実とは異なる季節を包含する」と、夏冬ふたつの季節における竹のありようを対比して詠む点が趣向となっている。どちらの様態も竹の緑の葉叢に関わるが、光行注の引く『文選』「呉都賦」に描かれるのは、冬の厳しい寒さに耐えて緑を保つ面のみで、夏に涼しい緑陰を作ることは「呉都賦」に典拠を持たない。【語釈】でも述べたごとく、平安後期以降、竹蔭が暑い夏に爽涼をもたらすことが歌に詠まれるようになる。掲出した堀河百首の匡房歌においても、「涼しさ」の語が用いられているが、さらに「竹風如秋」（基俊集27）、「竹風告秋」（林葉集364）のように、実際の季節は夏であるのに竹を吹く涼風が秋を感じさせるという趣旨を詠ませる設題が見られるようになる。また、「竹風夜涼」題で詠まれた、「やどちかき竹のうはばにかぜこえてあきとおぼゆる夜半のけしきか」（重家集22）、「まどちかきいささむら竹風吹けば秋におどろく夏の夜の夢」（新古今集・夏257公継）等は、まさしく夏の中にある秋を感じ取る内容になっている。竹を吹く風に秋を感じ取ることは、たとえば白居易に「風枝蕭颯欲秋声（風枝蕭颯として秋の声になんなむとす）」（和漢朗詠集・巻下「竹」）の詩句があるごとく、日本に独自の発想ではないが、光行がここで「百詠」本文にも「百詠注」にも、また自身が引用した「呉都賦」にも見えない「竹風の涼しさ」を詠んだ背景には、平安末期における「竹風」の詠歌史が影響しているのではないだろうか。

46　誰知湘水上リニ　流涙独思君ヲ　　堯の二人のむすめ娥皇女英は舜のめなり。舜かくれ給て後、二人の人、湘水のほとりに哀哭、涙を落こと雨のごとし。涙竹に灑ぎて、竹斑になりぬ。かなしびにたへずしてともに湘水におぼれてしぬ。此故にふたりを湘夫人といへり。

よをかさね物おもふ袖とひとつにや竹のすゑ葉も涙おちける

【百　詠】

誰知湘水上　流涙独思君（誰か知らむ湘水のほとりに、涙を流して独り君を思ふを。）

【百詠注】

誰知ラン湘水ノ上流シテレ泪ヲ独思フヲ君ヲ〈舜死ニ蒼梧ニ、二妃娥皇女英不レ従、泣染テレ竹ヲ成レ斑ヲ也。一本曰、湘夫人ハ舜妃也。舜崩ニ於蒼桐ニ、二妃奔テ哀湘夫人涙、染ニ斑竹ヲ、皆二妃溺レ水ニ死、故号ニ湘夫人一也〉（舜蒼

梧に死す。二妃娥皇女英従はず。泣きて竹を染めて斑を成すなり。一本に曰く、湘夫人は舜の妃なり。舜青梧に崩ず。二妃奔りて哀しみ、湘夫人の涙、斑竹を染む。皆に二妃、水に溺れ死ぬ。故に湘夫人と号するなり。）

【語　釈】

○娥皇女英　古代の聖天子とされる堯の娘で、ともに舜の后妃となった二人の女性の名。『列女伝』「母儀伝」に「有虞二妃、帝堯之二女也、長曰娥皇、次曰女英、堯挙舜為相摂行王政、毎事常謀於二女、舜既受禅升為天子、娥皇為后女英為妃、事瞽瞍猶若初焉、天子称二妃聡明貞仁、舜陟方死蒼梧、二妃於江湘之間、謂之湘君」と見える。**○湘水**　広西省興安県の陽海山を源とし洞庭湖に注ぐ川の名。湖南省雲陵県の西で瀟水と合して「瀟湘」と呼ばれる。**○哀哭**　人の死を悲しみ悼んで大声で泣き叫ぶ意。**○涙、竹に灑ぎて、竹斑になりぬ**　『初学記』第二十八「竹」の事対に、「張華博物志、舜死、二妃涙下染竹即斑、妃死為湘水神、故曰湘妃竹（張華博物志、舜死す。二妃の涙下りて竹を染め、即ち斑なり。妃死して湘水の神となる。ゆゑに湘妃の竹と曰ふ。）」と見える。『列女伝』の「娥皇女英」の話には、この話柄は見えない。光行注は百詠注に拠って記したのだろう。娥皇女英の涙が竹をまだらに染めたエピソードは、平安時代末期成立の『唐物語』にも載るが、『唐物語』では舜の没した場所を「湘浦」とし、二妃の涙を「くれなゐの涙」と記すなど、むしろ翻案が進んでいる。**○ともに湘水におぼれてしぬ**　百詠注の「一本」説に従った内容。「ともに」は「皆」訓じたもので、「二人とも」の意ではなく、「そろって一緒に」の意であろう。**○よをかさね**　「よをかさねしもとともにしおきゐればありしばかりの夢だにもみず」（詞花集・恋下261皇嘉門院出雲）のように、逢瀬を長い間待ち続けることを表現する例が多い。ここでは、夫を失った哀しみがいつまでも尽きないことを示す。**○物おもふ袖**　「おほかたにふるとぞみえしさみだれはものおもふそでのなにこそありけれ」（後拾遺集・恋四804源道済）、「しのぶれどなみだぞしるきくれなゐにものおもふそではそむべかりけり」（詞花集・恋219源道済）等、多くの用例がある。「物思ふ」は恋歌に用いられることの多い語だが、「思ふ」は「恋ふ」と異なり、ひとり孤独に苦悩と向き合う状態を示すことが多い。右の道済の二首と同様に、涙・露・玉などの語と組み合わせて、恋をめぐる苦悩を袖にかかる涙によって表現する例がほとんどである。ここでは、夫と死別した女の孤独な哀しみをかたどる。**○ひとつ**　二つ以上のものが一様であることを示す。**○竹のすゑ葉も**　「末葉」は先端の方の葉。「も」は「私の袖」と「竹の末葉」を同じく「哀しみの涙に濡れる」ものとして並列する。「竹の末葉」を用いた詠は少なく、ほとんどが鎌倉後期以降のものだが、光行以前の用例も「をれふしてたけのすゑばもうづもれぬよごとにまさるゆきのおもさに」（雅兼集40）等、わずかながら認められる。

【通　釈】

〈句〉　いったい誰が知っているだろうか。湘水のほとりで、涙を流しながら、（今は亡き）君を偲んでいることを。

〈注〉　堯帝の二人の娘娥皇と女英はともに舜の妃であった。舜が亡くなった後、二人の妃は湘水のほとりで激しく泣き叫び、まるで降る雨のようにひどく涙を流した。その涙は竹に注ぎ、竹はまだらになった。（二人の妃は）哀しみをこらえ

られず、一緒に湘水で（身を投げ）溺れて死んだ。このために、二人の妃を湘夫人と呼んでいる。

〈歌〉幾晩も（亡き帝を偲んで）つらい物思いをする（私たちの）袖と、同類なのだろうか。竹の末葉にも涙が落ちたことだ。

【余　考】

光行注では、二人の妃の涙について「雨のごとし」と記すが、落涙を雨に喩える表現は、百詠注にも、またその典拠である『張華博物志』や『列女伝』にも見られない。単なる翻案上の修辞とも考えられるが、【語釈】に引いた道済歌に見られるごとく、「袖」にかかる涙を「雨」と表現する和歌の伝統に引かれた表現か。

（中村　文）

巻第四　嘉樹部「松」

31　鶴棲(ム)君子樹(ニ)　松をば君子にたとふ。衆(モロモロノ)木をば凡人にたとふ。年寒くして四方の木末霜雪にをかされて、皆枯落時、松独緑也。このゆゑ(ヘ)にたとふ。又千歳の鶴松樹にすむと云り。又君子樹あり。そのは松に似たりともいへり。又昔滎(栄)陽郡のみなみ石の室あり。後に一つの松の十丈なるあり。この室に妻夫(メコ)ありけり。数百歳をへて化して鶴となりぬ。鶴一つがひこの木に棲て羽をならぶと云り。

やどしむる鶴の八千よの老木までいかにくちせぬ松のちぎりぞ

【百　詠】

鶴棲君子樹　風払大夫松　（鶴は君子の樹に棲み、風は大夫の枝を払ふ）

【百詠注】

鶴(ハ)棲二君子樹一　〈千年鶴(ハ)棲於松樹(ニ)一、君子樹葉(ノハ)似レ松(ニ)。曹爽曽(テ)種之於中庭(ニ)一也。一本神異記(ニ)曰、滎(栄)陽郡(ノニ)南有二石室一。室后有(ニ)弧松一。千丈(ナリ)。双鶴棲二其上(ノニ)一。晨(ニ)必接レ翅(ハネヲ)、夕輒(チ)偶レ影(ヲ)。広志曰、君子樹(ハ)似二檉(テイ)松一也〉（千年の鶴は松樹に棲み、君子樹の葉は松に似たり。曹爽曽て之を中庭に種たる也。一本、神異記に曰く、滎陽郡の南に石室有り。室后に孤松有り。千丈なり。双鶴其の上に棲む。晨に必ず翅を接し、夕に輒ち影を偶ぶ。広志に曰く、君子樹は松に似る也。）

【語　釈】

○嘉樹　めでたい樹。よい樹。　**○君子樹**　松。君子にたとえられる樹という意味で松をこうよぶ。また百詠注に『広志』を引いて「檉松に似る」君子樹があったように記すが、「檉」は、檉柳科属の落葉灌木で松とは科を異にする。　**○君子**　徳の高い立派な人。人格者。**○年寒くして…松独緑也**　陽明本『注百詠』割注に「論語子曰、歳寒然後知二松柏之後彫一也。言大寒之歳衆木皆死(カレヌ)。柏小彫(ハ)。平歳(ニハ)衆木有不死者故歳寒而後別(ワク)也。」とある。光行の注文はそれを踏まえて書いている。　**○千歳の鶴松樹にすむ**　千年も生きる鶴は松の木にすむ。俊成の歌に「松のもと千年の鶴のよるの声かめのみやまにさぞかよふらん（夫木抄巻二十七・1262）、為家の歌に「いろかへぬまつにすむつるわがきみのちよにちとせをかさねてやなく（為家千首842）。　**○滎陽郡**　諸本「滎」を「栄」に作るが『芸文類聚』に「滎」とあるに拠って改めた。隋代河南省鄭県にあった。なお滎陽郡の南の石室に住んだ夫婦の話の出典を百詠注『神異記』としているが、『芸文類聚』松では『神鏡記』としている。　**○十丈**　一丈は十尺、約三メートル。　**○**

（一九）

やどしむる　宿占むる。宿舎にして住む。　**〇いかにくちせぬ**「くちせぬ」は「松」と「ちぎり」の双方にかかり、松が枯れない、変わらぬ約束の両意に解する。　**〇松のちぎり**　松の約束。長く変節しない約束。「われをのみたのむといへばゆくすゑのまつのちぎりもきてこそはみめ」（兼家『蜻蛉日記』）、「はつせがはふるかはのべのすぎならでまつのちぎりにとしもへにけり」（鑁也露色随詠集383）。

【通　釈】

〈句〉鶴は君子の木にたとえられる松の木に棲む。

〈注〉松を君子に喩える。一般の木は凡人に喩える。寒い季節になって、四方の木の梢が、霜雪に冒されて、皆枯れ落ちるとき、松だけは緑を保っている。これにより君子の樹に喩える。また、千年も生きる鶴は松に棲むといわれている。又君子樹という樹がある。その葉は松に似ているともいわれている。又昔、滎陽郡の南に石室があり、その後ろに高さ十丈に及ぶ一本の松があった。この石室に夫婦が棲んでいた。数百年を経て夫婦は鶴となった。一つがいの鶴がこの石室の後ろの松に棲んで、羽を並べたと伝えられる。

〈歌〉八千年も鶴が宿を占めたという松、この老松はどのようにして枯れずに鶴の宿となる約束を守ったのだろうか。

【余　考】

語釈の項で指摘したが、光行の和歌の注文「年寒くして四方の木末霜雪にをかされて、皆枯落時、松独緑也」は、陽明本百詠注の「論語子曰、歳寒然後知二松柏之後彫一也。言大寒之歳衆木皆死（カレヌ）。柏（ハ）小彫。平歳（ニハ）衆木有不死者故歳寒而後別（ワク）也。」とあるところをふまえた表現である。この注文は我々が拠る慶応本には全く見当たらない。ということは、光行が見ていた百詠注は陽明本系の本であったことを示している。池田利夫氏は、陽明本と慶大本を比較して両者の注文が特に標題注の部分で大きな違いがあることを、この「松」の項を挙げて具体的に指摘され、両者の違いがどのようにして発生したか「筋道立って解明することはむずかしい」と論じられた。その上で、池田氏はこの「年寒くして云々」の部分に対する言及はなかったが、「総合的に見て光行の座右に置いた百詠注本が両者のいずれに近いかと言えば、陽明文庫蔵本になろう」と論じている。ここはその学説を支える根拠となるところであろう。なお、池田氏は『百詠和歌』が陽明本と慶大本の関係を解き明かす「最も豊富な材料」を秘めているとも指摘している。以上、池田説の引用は『日中比較文学の基礎研究　翻訳説話とその典拠　補訂版』所収「百詠和歌と李嶠百詠」による。

32　風掃大夫枝　秦の始皇泰山に幸し給道に、俄に風雨にあひて、松の下陰に寄て雨を過し給へり。此故に五の松樹に位を授けて五大樹と云り。

ふらぬ日はおなじみどりの松の枝に雨のめぐみは春の一しほ

【百　詠】

風掃大夫枝（風は大夫の枝を掃ふ）

【百　詠　注】

風払二大夫松一〈史記（ニ）曰、秦始皇封二大山一、逢二風雨一（ニ）。乃隠（カクル）二松樹一（ニ）。後遂封（シテ）二五松一（ヲ）為二大夫松一（ノト）也〉（風は大夫の松を払ふ。〈史記に曰く、秦の始皇、大山に封じ、風雨に逢ふ。乃ち、松樹に隠

る。後に遂に五松を封じて大夫の松と為すなり。〉

【語　釈】

○掃　はき清める。　**○大夫枝**　大夫は五位の通称。周の天子、諸侯の官吏で卿の下、士の上の身分の称。大夫の松は秦の始皇帝が雨宿りして五位の位を授けたという松の木の枝。　**○秦の始皇**　紀元前二二一年～二〇五年の間に天下を統一して秦国を築いた帝王。通称始皇帝。　**○泰山**　中国山東省にある名山。　**○幸**　行幸。天子が出行すること。みゆき。　**○雨を過す**　雨宿りをしてやむのを待つ。　**○此故に**　松の木が雨宿りの宿になってくれた故に。　**○ふらぬ日はおなじみどりの松**　雨の降らない日は他の木と同様な緑色の葉をつけている松。　**○雨のめぐみ**　雨がもたらす恵み。雨が樹木をうるおすという恵み。ここでは、皇帝から与えられた五位という栄誉は雨がもたらしたものとして雨の恵みといった。　**○一しほ**　一しほは布を染め汁に一度入れて浸すこと。緑の色がひときわ鮮やかになることを言った。一しめり。また、ひときわきわだつの意。他の木とくらべて松は雨の恵みをきわだって多く受ける。

【通　釈】

〈句〉風は五位の栄誉を与えられた松の木の枝をはき清める。

〈注〉秦の始皇帝が泰山に行幸なされた途中、俄に風雨に遭遇して、松の木の下に立ち寄って雨宿りをされた。松の木が雨宿りの宿になった故に始皇帝は、その五本の松樹をたたえて五位の位を授けて五大樹と呼んだという。

〈歌〉雨の降らない日は他の木々と同じ緑の松の枝なのに、雨のように注ぐ天の恵みで、ひときわ栄えある松になったよ。（晴れた日には他の木々と同じ緑の松の枝なのに、春雨の一しめりで、その緑を一層きわ立たせているよ。）

【余　考】

句中の「掃」は百詠注の諸本「払」に作る。内閣文庫にある百詠和歌の一本（一三〇―一）も「払」とある。もう一本は（一三〇―二）は「掃」となっている。歌に詠み込まれた意味としては「払」より「掃」の方がしっくりしていると思われる。百詠の句は「風が大夫の枝を掃う」とあって、五位の栄誉を与えられた松の枝を風がはき清めると言っているのに、歌では風は出て来ないで雨だけを取り上げているところ歌題に合わない。それは百詠注に引く史記の句中に「秦始皇封二大山一、逢二風雨一」とある雨に視点を移して詠んだためと思われる。光行注にも「俄に風雨にあひて」としているが、それにしても歌題との整合性に欠ける。

（山田昭全）

A Commentary on *Hyakuei-Waka* (2)

HU, Zhiang　YAMABE, Kazuki　NAKAMURA, Aya　YAMADA Shozen

キーワード：源光行、『百詠和歌』、『李嶠百詠』
Key words ：MINAMOTONO Mitsuyuki, *Hyakuei-Waka*, Rikyo-Hyakuei